

ダニエル・ヤーギン著「探求—エネルギーの世紀(下)」日本経済新聞社 2012年4月2日刊を読む

### もったいない—‘貴重だから無駄にできない’

1. 日本は、エネルギーを最大限に活用することに関して、世界に範を示している。1970年代以来、日本はそれをずっとつづけてきた。
2. 1970年代の数度のエネルギー危機は、日本を大きく揺るがした。高度成長の道がとぎれたことに、日本は忽然として気づいた。エネルギーに関し、国家として脆弱であることを、オイルショックによって日本人はひしひしと感じた。その後の危機は、日本人を団結させた。「みんながともに努力した」当時、通産省審議官だった天谷直弘は、その数年後に述べている。「日本人は地震や台風のような危機に慣れている。このエネルギー・ショックはきわめて大きなショックだったが、順応する備えがあった」天谷はなおもいう。「私たちは、地面のなかの資源ではなく、頭のなかの資源を使う」
3. かくして、エネルギー効率を目指す日本の大攻勢がはじまった。多大な工学・機械技術の才能を、エネルギー関係の創意工夫に集中的に注ぎ込み、どのエネルギー機器からもより多くの価値を取り出した。もっとも、アイデアがすべて成功したわけではない。1970年代後半、夏のエアコン使用を減らすために、オフィスワーカーに新しいメンズファッションが勧められた。半袖のビジネススーツという代物だった。首相が手本として着たにもかかわらず、この省エネは、まったく流行らなかった。
4. いっぽう、日本の社会全体でエネルギー運用とプロセスの効率を向上させるための資源投入は、成功を収めた。他の社会とはちがひ、日本ではそう難しくなかった。土地が狭く、資源が逼迫しがちな日本では、歴史的な経験に根ざす儉約と気配りが伝統的文化なので、それと結びつけばいいだけだった。土地がふんだんにあり、資源が豊富で、雄大で自信満々の地勢を基盤としているアメリカの歴史的経験とは、基本的な考えかたがまったく逆だ。
5. のちに外相をつとめた川口順子は、当時の環境相だった。現在、参議院議員の川口は、高校生のときに交換留学生としてはじめてアメリカに行ったときの自分の反応を憶えている。「クリスマスにアメリカの家庭では、クリスマスプレゼントをあけたあと、包装紙を捨てていました。日本では包装紙を丁寧に畳んでまた使うので、とてもびっくりしました。私たちなら、“もったいない”というところですよ」
6. “もったいない”という言葉が英語に訳すのは難しい、と川口は説明する。それに苦勞したため、訳語をひねり出すための会議が、外務省内で行なわれたほどだった。“貴重だから無駄にできない”が最善の訳語だという結論が出た。

7. 「“もったいない”という意識で私たちが 1000 年以上も物事に取り組んできたのは、なにひとつふんだんにある物がなかったからです」川口は説明する。「ですから、資源について思慮深くあらねばなりませんでした。どの家でも子供はそうしつけられますが、私も家で、ご飯はひと粒も残してはいけなしつけられました。それが“もったいない”です。貴重だから、無駄にはできないのです」
8. “もったいない”という意識は、日本のエネルギー効率への取り組みを支えている。それが 1979 年の省エネ法(エネルギーの使用の合理化に関する法律)で成文化された。省エネ法は、1998 年にトップランナー方式の導入とともに改正強化された。トップランナー方式では、もっともエネルギー効率の高い家電製品や自動車を具体的な等級—トップランナー—に位置づけ、すべての家電や自動車がそのトップランナーの効率を一定期間内に超えることを求める。これが性能競争を引き起こし、効率の最低基準がどんどん引き上げられる。めざましい成果があがっている。ビデオデッキの平均効率は、1997 年から 2003 年にかけて 74%向上した。テレビですら、1997 年から 2003 年のあいだに 26%向上した。法律はさらに改正され、工場や建築物も改善が義務づけられ、効率向上計画を採用することが求められている。
9. 日本政府は、あらたな投資に便宜をはかるために、幅広い税額控除を駆使している。また、効率の目標が達成されなかったとき、勧告に従わなかった場合には、罰則として罰金が科せられる。アメリカの体制ではどうてい受け入れられないような罰則である。しかし、日本の価値観や資源が乏しいという立場や政治体制—それらすべてが、これを日本で容認される政策となしている。
10. 効率に対するこの取り組みは、2011 年のあらたなエネルギー危機の最中に厳しい試験をくぐり抜けた。福島第一原発事故により、日本の一部地域は深刻な電力不足に直面した。そういう状況のもとで、“もったいない”は選択肢ではなく、責務になった。

P328 ~ 330

[コメント]

原子力発電なしの世界の中で、どうエネルギーの供給を果たしたらよいのか。日本の「もったいない」の精神で、スマートグリッドの研究開発を世界の英知を集めて行い、実用化することかも知れないと、本書を読んで感じた。

— 2012 年 5 月 12 日 林 明夫記 —